

■■■「釜ヶ崎の防災・減災を考える」シリーズ(3)

釜ヶ崎のまち再生フォーラム（事務局長）ありむら潜

「支援団体やボランティアは防災や災害時に何ができるか～阪神地区の経験から学ぶ～」

語り手：寺本弘伸氏（日本災害救援ボランティアネットワーク理事）

2005年2月8日（火）18:30～20:45

参加者14名

<講演メモから>

1) 自己紹介

2) 阪神・淡路大震災をふりかえる

▼ボランティアや救援物資が殺到。失敗しながらそのさばき方を学んだ

95年1月17日に地震が発生。当日、公務員は1割だけ出勤可能だった。救援物資とボランティアの問い合わせが殺到（最終的にはのべ140万人にのぼったのだが）。

→「あとで調整してから追って連絡する」と回答→大混乱。「登録してから連絡なし」の苦情

⇒

2月1日には行政と同じテーブルにつき、情報を共有しながら連携するという「西宮方式」を確立した（13団体）。西宮ボランティアネットワーク（NVN）が誕生

⇒ボランティアの受付方法を改善した

・ボランティアしてほしいニーズをポストイットで掲示→集まったらリーダーがオリエンテーションを。

・誰が見てもわかるように掲示をしていくことがだいじ

→ボランティアセンター本部が必要

・救援物資は保管の問題がある。1個のダンボールにいろんなものが……。整理に困る。送る側はせめてマジックで記載を要請したい。

3) ボランティア活動について

▼ボランティアにできること

時間経過によってボランティアしてほしいニーズが変化してくる（以下、時間順に）

・炊き出し、医療、物資配布、風呂、マッサージ、

- ・子供の遊び相手（ストレスで幼児化）
- ・水汲み、家のかたづけ
- ・家屋の診断（専門家）
- ・仮設住宅への引越し手伝い
- ・相談相手（仮設での心のケア）
- ・長期的ケア

被災後3日間（初期段階）は自分たちで生き延びる必要あり

この段階のボランティアは「近隣（地域内）からのみ受入れる」もありうる。

それ以後～1ヶ月目くらいまでは一般（外部）ボランティアを活用できる

専門家のボランティアは一貫して一定のニーズがある

▼ボランティア活動にも問題点がある

- ・自己完結型で来てほしい（旅費・食事は自分で）⇔旅費片道で来る人もいる
- ・やりたいこと、やれることをはっきり言うこと
- ・自己満足型は困る（誰のために：逆に被災者に負担がかかることも）
- ・撤退時期を最初に考えておく⇔依存が増してしまう。自立を疎外してしまう
- ・業者まがいのよからぬボランティアもいる
 <例> 携帯電話業者→後日、口座引き落とし。
 引越しボランティア→カタログを出して不足品を買わず
- ・コーディネーターの重要性（なのに、不足している）
- ・ボランティアの限界、行政の限界（公平性とか順を追って対応とかせざるをえない）
- ・産・官・学・民の連携
- ・自助・共助・公助の関係とバランス

4) 避難所と仮設住宅の事例から

▼ある小学校では

- ・地震発生後2週間（1/17～1/31）は体育振興会（ふだんからスポーツで顔見知りだった。若さがある）が中心に運営
- ・2月からは避難所の自主組織が中心になって運営された
- ・1月17日午前6:00（発生直後）には住民が小学校に避難。門を超えて校内へ。教室はびっしり →夕方。おにぎりの差し入れが490個（足りないので、老人や子供に先に配給） →夜。1200人に増加。
 →発生3～4日後にボランティアが到来した。ボランティアは世話役の指示のもとに動く

ようにした。ボランティアが主導権を握ることは意識的に回避した。
 →発生1ヵ月後(2月下旬)に避難所に来た外部者への配給は地域内部からの避難者と区別するようになった。「Aファミリー」に対して「Bファミリー」と呼んだ。これによって、避難所の運営は安定していった。

▼仮設住宅の高齢者への対応はどんなものがあったか

- ・大工ボランティア
 - ・戸別訪問
 - ・ふれあい交流サロン
- <さまざまな問題点>
- ・コミュニティが崩壊した(住み慣れた住民と離れてしまった)
 - ・とじこもりの発生
 - ・孤独死の問題が発生した

5) 自主防災組織について

- ・西宮市の事例では消化活動に効果があった。初期の火災消火に
- ・問題点としては、組織や地域の高齢化があった→中学生も参加させた

6) わがまち再発見ワークショップ

- ・「地域防災と言わない地域防災」という取り組み
- 楽しみながら再発見→防災マップにしていく

7) まとめ(事前の備えについての教訓)

- ・地域の事情にあった訓練であるべき
家具の点検隊、わが町防災探検隊(防災マップづくり)
避難訓練(臨機応変にやること)
- ・ボランティアの理解
- ・リーダーシップ&コーディネーターが必要
- ・顔見知りのたいせつさ(→コミュニティや他分野との連携へ)
- ・自助、共助、公助の考え方(たいせつさ、そのバランス)

■ 意見交換メモ

▼盗難は避難所よりは留守宅のほう

「住民組織はどうしたか。役員はリーダーシップをとったか？」
 「多くが高齢なので、役に立たなかった。自分自身がタイヘンだったから」

「避難所の雰囲気はどうだったか。シェルターでの盗難とか」

「留守中の家での盗難のほうが多かった。刑法でもこの罪は重い」

▼避難所での地域内住民と地域外住民の関係

「Bファミリーというものについてくわしく話してほしい」

「学校内ではあるが体育館の外にいる人々のことで、地域外（校区外）から避難してきている人々が多い。外部からモノだけもらいに来る人もいた。その地域住民からすれば、中途半端な存在。水・食糧が十分に無い段階では彼らへの配給は困難。本来はエリアで分けたかったが、あいまいにならざるをえなかった。つぶれた家もつぶれていない家も避難所で配給した。何をどこでどう判定するのか、初動段階では混乱して何もできなかった。状況が落ち着いてくると、そういう人たちにも配っていかうということになった（しかし、数は限られる中で）。食糧のためにだけ入っている人もいた。」

▼集中と分散の兼ね合い

「“ライフラインは止まっている・トイレも止まっている・でも建物は無事”というパターンの地域はいくつもあると思う。そんなときはわざわざ体育館に集まらなくてもいいのではないかと思うのだが、どうか。混乱のもとになるのではないのか」

「配給拠点があって量もあって、給水車もひんぱんに動けることが条件。それと、救援物資配給マップも必要。そうしたことの事前把握が重要」

「トイレはたいへん重要な問題で、神戸では途中からマンホールを直接活用し始めた。結局、これが一番いいと思う」

▼ルツボ型よりもサラダ型

「釜ヶ崎のことを考えると、ボランティア団体・支援団体など労働者住民サイドでサミット的な場が必要だろう。というのは、ふだんから顔見知りであり、つながりがあるかどうかは決定的な要素だから。その点で支援団体はこの地には数もたくさんあり、非常時にもとても重要な役割を果たせるのではないか。そのうえで、すでにある程度のしくみづくりや訓練もしている町会住民と連携して動くかたちがいいのでは」

「みんながいっしょに避難するという坩堝（るつぼ）型でなく、日頃のつながりを生かして住民層ごとに動く、住み分ける、いわゆるサラダ型がこういうときにもよいように思える」

以上